

## 七十年目の奇蹟

く見えてきた兄の最期 く

公益財団法人海原会

参与 行方滋子

遺族会の方から連絡をいただくまでの七十年間、兄は敵の砲弾にやられて、海の藻屑と消えたと思いつ込んでいました。しかし、兄は最期のときまで立派に務めを果たしていたのですね・・・。」と静かに話すのは、故海軍少尉山岸啓祐命のご実弟 山岸修次さんです。

私は、第四十七回豫科練戦没者慰霊祭 平成二十六年の折、修次さんが記した詩「昭和二十年四月十二日」を朗読させていただきました。

1  
修次さんは、この詩を書くに至った経緯について、私は兄の戦友から話を聞いてとても感銘を受けたのです。戦友の胸の奥に焼き付いた在りし日の兄の姿とその想いを、ぜ

ひ文章化して残さねばと思いましたが。」と語っておられました。

そのようなご縁から、平成二十八年三月六日 但、日本最古の学校遺跡として昨年日本遺産になった有名な足利学校がある栃木県足利市に、山岸修次さんを訪ねました。この日は、修次さんご夫婦と山岸少尉の妹、アサ子さん 長女、和子さん（五）、秀子さん（四女）が優しい笑顔で温かく迎えてくださいました。ここからは、ご姉弟の皆様に向った話と、頂いた資料を基につづりたいと思います。

山岸啓祐海軍少尉は、大正十四年二月二十八日に栃木県足利市に父 勝、母 チョウの長男として生まれました。飛行機がとて好きな少年で模型を作っては、よく飛ばして遊んでいたそうです。尋常高等小学校を優秀な成績で卒業後、中島飛行機青年学校で勉学と勤労に励んでいた時に飛行機への強い憧れから豫科

練を志願しました。

両親に予



科練の志願を話したとき、母親はすぐに賛成してくれましたが、父

親は徴兵で軍隊に行くから、無理に行かなくていい」と反対したそうです。

その後、反対する父親を説得し、昭和十七年五月一日、第十八期乙種海軍飛行予科練習生一、四七六名とともに土浦海軍航空隊に入隊、十八才の時のことでした。

昭和十七年八月九日、三ヶ月前に入隊したばかりの十八期生に、思いがけなく十日間の夏期休暇が与えられました。入隊して間もないうえに戦いの最中に休暇が与えられるのは異例のことでしたが、練習生達は故郷に帰り、思い思いに恩師や近親の家々に挨拶回りをしたり、先祖の墓前で今まで無事に奉公したことを報告し、尚一層奮励努力し海の

荒鷲となることを誓ったことでしょう。

アサ子さんは、夏期休暇の様子を 昭和十七年の夏、兄が帰省してきたとき、母は、おはぎやきんぴらを作ってもてなし、ふかふかの布団を準備したりしていました。兄をととても大事にしていましたから・・・。その夜、母に風呂に入る兄の背中を流すように言われ、風呂場に行きました。兄は、私が背中を見た途端、睨わなくていいから、向こうにいけ」と言いました。私は、その時、兄の背中にいくつもある紫色の痣を見ました。痣だらけの背中を見て、息を呑むと同時に、痛々しい傷跡に軍隊そのものの厳しさを感じました。」と静かに語りました。

私はそれを聞いた時、灯火管制で薄暗い中に見える背中を思い浮かべ、切なさが込み上げ胸をギュッとつかまれましたように苦しくなりました。昭和十七年九月になると、操偵別の適性検査が始まり、

同年十一月一日には豫科練の制服がジョンペラから七つ釦に改正されました。

和子さんは、当時をふり返り 私が、国民学校四年生の頃、兄が七つ釦の白い制服を着て、学校に来ました。その時、『後輩よ、後に続け』と講演している姿を見て、大変誇らしく思いました。そして、その時の様子は新聞にも掲載されたんですよ！と輝くような笑顔で仰っていました。

入隊から約二年後の昭和十九年三月、アサ子さんからみて十七歳下の弟、修次さんが誕生しました。アサ子さんは、妹弟の面倒を見ながら働くことになり、女学校卒業と同時に女子挺身隊として、中島飛行機工場で働くことになりました。

当時のことを、私たちが作る飛行機で大丈夫かと不安に思いながら、作業をしています。とふり返っていました。昭和十九年、アサ子さんが両親とともに面会のため第二郡山海軍航空隊（福島）を訪

れた時、山岸二飛曹はアサ子さんの肩をしっかりと握り締め、後のことはしっかりと頼むぞ」と言いました。それを聞いたアサ子さんは、これが最後かな」という予感がしたそうです。

お話の途中で修次さんから貴重な遺品箱（木箱）を見せていただきました。遺品箱の中に入っている沢山の手紙の中から一枚の葉書を手に取りましたが、この便りの奥に家族を想う気持ちと故郷を思う心を感じ万感胸にせまって、何を話していいのかわからなくなりました。

羽取り有り難う。家では皆元氣とのこと安心しました。兄さんも毎日元氣ですから安心して下さい。

前の池は埋めてしまったので蛙の鳴くのが少ないと思ひますが、それでも苗代から聞こえるのがにぎやかと思ひます。修次も笑ふ様になったとか大きくなったことと思ひます。河合の利夫さんも飛行兵として入隊したさうですね。

姉ちゃんも挺身隊で張切って勤めてゐることと思ひます。

サト子も二年生になったんだからうんと勉強しなさい。和子達からの慰問文も戴きました。

では、お父さん お母さんに宜しく さようなら』

郡山からの便り

こうした便りをくれた山岸二飛曹ですが、宇佐からの便りを最後に連絡はとだえ、当時は安否はもちろん所在地すらも家族には知らされることなかったのです。



後になつてわかったところでは、第二郡山海軍航空隊から宇

佐海軍航空隊 大分を経て、昭和二十年四月十二日に第一国分基地（鹿児島）より特攻出撃、彼が二十一歳になって迎えた春のことでした。

出撃してから一年以上が経った昭和二十一年十一月、昭和二十年四月十二日、艦爆八幡護皇隊神風特別攻撃隊トシテ沖縄周辺ニ出撃シ、敵艦体当タリシ戦死ス」という公報が家族に届きました。終戦から公報が届くまでの長い空白の時間は、何とも言えない思いだったと回想しています。



公報が届いた後、英霊を宇都宮県庁まで迎えに行き、多くの町民が迎えるなか、白木の箱に入った兄は祭壇に安置されました。数日後、開けてはいけない白木の箱を開けてしまい、遺骨はなく『喪霊』

と書かれた紙が入っているのを見た母は、大声を上げて泣き崩れ、いつまでも泣き止みませんでした。気丈だった母は、その日から床に伏し、起き上がれなくなり、昭和二十二年三月十日に四十六歳の若さで亡くなつてしまいました。」と涙を堪えながら話してくださいました。

母親の葬儀の日、三歳になつたばかりの修次さんは、母ちゃんの寝ているこの箱に入つてぼくも寝る。」と泣き叫んでいたそうです。

しばらくして私が、お兄さんは、修次さんに会つたことはあつたのでしょうか？」と問いかけると、「度だけ会いました。その時、『これが、弟か』と言つていたようです。」と答えてくださいました。私は、山岸少尉が弟の顔を見ながら、後のことは頼んだ。これで安心だ。」と頭をそつと撫でたのではないかと想像せずにはいられませんでした。

平成二十七年八月十四日、姉弟が揃つて、山岸少尉のお

盆の供養をしている丁度その時突然、東京白鷗遺族会 海軍予備学生同窓・遺族の会）事務局常任委員の方から電話が入つたそうです。

電話の主は海田さんといひ内容は、戦後七十年の今年、米軍の記録によつてお兄さんの最後の様子が明らかになりました。姉弟の兄、山岸啓祐さんは、海兵出身者ではないといふことで、偵察員なし、電信機なしで、往きの燃料だけを積んで国分基地を飛び立ち、沖繩の南東の喜屋武岬の東方三キロ付近で、米戦艦テネシーを発見。艦砲射撃を避け得た二機が突入して散華しました。そのうちの二機が山岸機だった。」といふものでした。

まさに奇蹟・・・、真実を知つた時の心情を修次さんは、見ず知らずの人からの、あまりに驚きの知らせだったので、霊界から兄が指示しているのかと思ひました。信じがたい事でもありますが、七十年経つたその日まで、兄は敵

の砲弾にやられて、海の藻屑と消えたと思ひ込んでいました。見知らぬ海田さんに兄の最期の様子を教えていただき、兄は、本当はお国のために役に立つたのですね。最期まで頑張つた兄を本当に誇らしく思ひます。そして、兄の最期を教えてくれた海田さんには、本当に感謝しております。」と話してくださいました。

では、なぜ海田さんが連絡をくれたのでしょうか、その答えは後日送られてきた手紙で明らかになりました。

靉が、第十三期海軍予備学生丸林勘一少尉の特攻の記録を調査していた時、平成二十四年八月二十八日にNHKのクローズアップ現代 なぜ遺書は集められたのかの映像の中に丸林少尉と一緒に出撃した山岸啓祐二飛曹の写真と遺族の方がテレビに映っているのを見ました。防衛研究所で調べたところ、昭和二十二年四月十二日、宇佐空 第二八幡護皇隊 第六小隊は十一時五十分第一国分基地を発

進。小隊長丸林少尉 一番機

操縦（猪熊明二（飛曹・偵察）

丸林勘一少尉、二番機 操縦）

吉見三郎少尉 十四期予備学生、三番機 操縦）山岸啓祐

二飛曹でした。日本海軍の記録には、六小隊 一四五〇敵

艦見ユラ報ジ爾後消息不明未

帰還」と記録されていますが、

米軍の記録では十四時五〇分

一番機駆逐艦リンゼイの一番

砲塔付近に突入し艦内で爆発

艦首部分が切断され海中に沈

没と記されていました。

さらに吉見機と山岸機は、

沖繩南東の喜屋武山岬の東方

三キロ付近で戦艦テネシーを

発見、十四時五十分頃に吉見

機が前部マストの塔をめがけ

て突入するもわずかに外れて

信号艦橋に激突爆発、後部の

船体構造を破壊して火災を発

生させました。次にわずかな

時間差で山岸機が後部の第三

主砲塔に二百五十キロ爆弾を

投下し機体は砲塔横の木甲板

を貫通して艦内で爆発、飛び

散つたガソリンにより付近一

帯が火災となつたことがわか

りました。一機とも電信機なしでしたが、日本海軍の記録十四時五〇分と突入された米軍の記録十四時五〇分が一致したのです。

戦後七十年アメリカ海軍の記録で山岸啓祐二飛曹の最期が判明し、「ご遺族の方感無量の思いでございます。ぜひ、故海軍少尉山岸啓祐命の仏壇に供えて冥福を祈って下さい。」と書かれていたのです。

四女の秀子さんは、兄は、すごい人です。」と目を輝かせながら何度も仰っていました。が、その時の目の輝きがとても印象的で今も忘れることはできません。

私はこの奇蹟に触れたとき修次さんの詩を思い出し、彼は機上で手を振りながら戦友に何と叫んだのだろうか、そして最期の瞬間まで漆黒の大きな瞳で敵艦を見据え、お母さん一と叫びながら体当たりしたのだろうか・・・、そのようなことを考えながら窓から見える空を見上げました。

山岸少尉が戦死したと知るまでの空白の時間、そして、最後の瞬間を知るまでの七十年という歳月はあまりにも長過ぎて、「ご遺族の気持ちを感じると言葉では表せません。」

しかし、どんなに時が流れても兄を慕う気持ちから靖国神社を始め、茨城、広島、浜田島、大分、宇佐、鹿児島、知覧、鹿屋、沖縄など各地にある記念館や資料館を訪れたり、一八会慰霊祭（京都）や豫科練戦没者慰霊祭（土浦）に参加するなどして慰霊を続けてきた姿勢にはとても頭が下がります。

姉弟が慰霊を続ける中で特に印象に残っているのは、教育参考館（浜田島）に保存されている兄の遺書（手紙）を館長さんから見せていただき鄭重に対応していただいたことと、何処も自衛隊の方々を心を入れて慰霊碑に供花をあげ綺麗に周辺を整備してくれていることだそうです。

そして想いは引き継がれ、今では秀子さんの息子さんも

一緒に各地を訪れ、叔父である山岸少尉の慰霊をしているそうです。

お話の最後に、お兄さんに伝えたいことはありますか？と伺うと、姉弟の絆が強いのは、兄のおかげです。ありがとうございます、感謝しています。見守ってくれて、ありがとうございます。」と、声を震わせながら仰っていました。

二女の里子さんですが、山岸家の病気は自分が持つて行く。」の言葉を残し、三十三歳の若さで病気のために亡くなりました。その枕元には、きつと優しく微笑むお母さんと啓祐さんがいらっしやったことでしょう。

そして、里さんが亡くなって以降、その言葉通り山岸家では命にかかわるような大きな病気にかかる人はいないそうです。

半世紀以上たった後に兄の本当の最期を知った山岸さんのお話を聞き、航空、水中、水上特攻で散華した予科練出身戦没者の方々にも本当は立

派な戦果があったにもかかわらず、それが日本の記録はもとより多くの御遺族も知らされぬままでいる方がたくさんいらっしやるのではないかと思われる訪問でした。

合掌

昭和二十年四月十二日

山岸 修次

飛び立つ前の点呼の時  
啓祐君はいなかったんだよ

兄の戦友は白髪をなでながら言った

僕が走りまわって探すと  
これから飛び立つ戦闘機の下で

啓祐君は寝ころんでいたんだ  
青空に浮かぶ白い雲を見ているようだった

この雲を故郷の母も見ている  
だろうか  
父も、四人の妹も幼い弟も見

ているだろうか  
そう考えていたに違いない

兄の戦友は薄らと涙を浮か  
べながらそう言つて空を見上  
げた

啓祐君」

僕は寝ころんでいる彼を呼ん

だ

彼は何も言えなかった

彼の胸のポケットに桜の小枝  
を差した

啓祐君は何か言おうとしたが  
口をへの字に曲げて敬礼をし  
た

漆黒の大きな瞳は涙で溢れて  
いた

そして隊のほうへ走つていっ  
た

兄の戦友はそこまで言うとし  
肩を震わせてしばらく無言  
が続いた

それから啓祐君は機上の人と  
なつた

胸のポケットに桜の小枝が見  
えた

手を振つて何か叫んだけれど  
何を言つたか分からなかった

昭和二十年四月十二日

啓祐君は沖繩周辺の米艦隊を  
目指し

出撃していった

二十二才だった

.....

私はいつか啓祐君の出撃する  
その日の様子を家族に伝えね  
ばと思つていた

いつもいつも頭の中にあつた

今日、弟さんに伝えられて

やっと願いが叶えられた

啓祐君は戦死したが

僕は生き残つた

生き残つた僕たちは

空を駆けていった啓祐君たち  
を

一日も忘れたことは無く生き  
てきた

一日仕切りの精神で

啓祐君たちの分まで世の中に

尽くそうと

がんばつてきた

でもあとわずかできつと

啓祐君たちに逢えるさ

兄の戦友はそう言つて  
ホッとした顔をして笑顔を見  
せた

やさしい眼をして笑つて見せ  
た

平成十七年四月十二日

弟修次記す